

2022年度

高校模擬国連国際大会への 第16回日本代表団派遣支援事業 報告書



Global Classrooms®

Learn. Live. Lead.

目次

はじめに.....	3
団体紹介.....	4
事業概要・派遣報告.....	7
参加者報告	
アドバイザー.....	9
派遣生.....	12
支援団体一覧.....	34

はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への 16 回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆さまにお届けできる運びとなりました。本事業にご後援いただいた関係省庁・団体、ご協賛、ご協力いただいた企業・法人等、多くの皆さまからの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業は 2021 年 11 月 13 日から 14 日に行われた第 15 回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた 7 校 14 名の高校生が、日本代表団として国際大会に参加するというものです。今回、日本代表団はロシアの大使として世界中の高校生が集まる舞台で、できる限りの準備をして会議に臨みました。

今回の派遣支援事業において派遣生は皆、持てる力を総動員して世界に挑戦しました。オンライン上ではありましたが、世界中の高校生たちと議論を交わす中で、うまくいくこともあれば思い通りにいかないこともあったはずです。そうして世界の広さを肌で感じることは、自分の能力や将来について考えだす大きなきっかけとなったのではないのでしょうか。派遣生が今回の派遣を「スタートライン」として捉え、新たな未来への一歩を踏み出すことを心より願っております。

最後に、本書が多くの人に読まれ、日本における高校模擬国連活動のさらなる普及と発展の一助になることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本協会へのご支援・ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本協会 2022 年度 事務総長 高田陽一郎

団体紹介

グローバル・クラスルーム日本協会は、高校模擬国連活動の普及と発展を目指し、全日本大会の開催及び国際大会への派遣支援活動を行う団体です。私たちは、以下の理念に基づいてこれらの活動を行なっています。

「国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進するとともに、豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出する。」

2007 年、弊協会の前身たるグローバル・クラスルーム日本委員会が日本で初めて高校模擬国連国際大会への日本代表団の派遣支援を行ったことから、日本の高校模擬国連活動が本格的にスタートしました。それ以降、全日本高校模擬国連大会を毎年開催し、優秀な成果を残した生徒の高校模擬国連国際大会への派遣支援を続けています。なお、2012 年より公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターと事業を共催しておりましたが、同センターが全日本高校模擬国連大会及び高校模擬国連国際大会の両事業から撤退したため、本年度より単独主催者として実施して参りますので、ご支援・ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

【会員】

アドバイザー（敬称略）

特別顧問 明石 康

公益財団法人京都国際会館理事長／元国連事務次長

評議員（敬称略・順不同）

代表理事 星野俊也

日本模擬国連 OB／大阪大学大学院国際公共政策研究科 教授

前国際連合日本政府代表部大使・次席常駐代表

紀谷昌彦

日本模擬国連 OB／在シドニー総領事

澤田宏

岐阜県立岐阜高等学校教諭

竹林和彦

早稲田実業学校教諭

中村長史

日本模擬国連 OB／東京大学大学院総合文化研究科特任助教

米山 宏

公文国際学園中高等部教諭

運営会員

事務総長 高田陽一郎

慶應義塾大学環境情報学部 3 年

副事務総長 兼 派遣担当主査 西田翔

慶應義塾大学法学部政治学科 2 年

副事務総長 山内梨々花

上智大学法学部法律学科 2 年

研究次長 田部井淳志

東京大学工学部計数工学科 3 年

広報次長 佐藤茜音

青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科 2 年

事務次長 兼 選考主査 三浦紘

慶應義塾大学経済学部経済学科 3 年

主計次長 大久保慶隆

慶應義塾大学総合政策学部 1 年

選考主査 持松進之介

慶應義塾大学経済学部経済学科 2 年

地方展開主査 田口蒼依

慶應義塾大学商学部商学科 3 年

市川茉由子

明治学院大学文学部英文学科 2 年

伊藤 碩

東京理科大学工学部建築学科 1 年

川崎 莉音

東京大学法学部 3 年

清原 萌香

上智大学法学部法律学科 1 年

田中 愛莉

山形大学人文社会学部人文社会学科 1 年

羽山 雄貴

宇都宮大学工学部基盤工学科 1 年

丸小野 成輝

東京大学教養学部理科三類 1 年

森脇 優

京都大学教育学部 1 年

後藤 慧

東京大学教養学部文科二類 1 年

近藤 紀仁

早稲田大学政治経済学部政治学科 3 年

丹後 向日葵

早稲田大学国際教養学部国際教養学科 2 年

出口 啓貴

早稲田大学政治経済学部 2 年

議場概要・派遣報告

【企画名称】

2022 年度高校模擬国連国際大会への第 16 回日本代表団派遣支援事業

【主催】

グローバル・クラスルーム日本協会 (JCGC)

【日程】

2022 年 4 月 10 日 (日)	政策発表会
2022 年 5 月 7 日 (土)	中満様への表敬訪問
2022 年 5 月 12 日(金)～5 月 14 日(日)	高校模擬国連国際大会
2022 年 6 月 19 日(日)	派遣報告会・石川直己様への表敬訪問

【開催形態】

オンライン、派遣報告会に限り対面にて実施

【内容】

米国国連協会などの主催により開催される高校模擬国連国際大会(Altitude Model United Nations Conference)に、グローバル・クラスルーム日本協会主催の第 15 回全日本高校模擬国連大会にて選出された高校生が日本代表団として参加するための派遣支援事業である。

【参加者】

1) 日本代表団 (14 名)

海陽中等教育学校	小澤 秀周	中島 大雅
渋谷教育学園幕張高等学校	金成 華琳	金城 芽依
頌栄女子学院高等学校	田原 幸奈	松本 彩
聖心女学院高等科	永田 理華	三澤 聖子
桐朋高等学校	稲田 孟	小池 翔太
灘高等学校	湯川 友太	高島 晟輔
武蔵高等学校	股野 晃瑛	菊池 亮

2) グローバル・クラスルーム日本協会 (3 名)

副事務総長・派遣担当主査	西田 翔
研究次長	田部井 淳志
研究	近藤 紀仁

【参加会議】

高校	派遣者	議場	議題
海陽中等教育学校	小澤 秀周 中島 大雅	国連総会第2委員会 (UNGA2)	Tackling the Imminent Global Debt Crisis of a Post-Pandemic World
渋谷教育学園幕張高等学校	金城 芽依 金成 華琳	国連安全保障理事会 (UNSC)	Deescalating the Tigray War
頌栄女子学院高等学校	田原 幸奈 松本 彩	世界保健機関 (WHO)	Addressing the Global Health Inequities Present in Treating Noncommunicable Diseases
聖心女学院高等科	永田 理華 三澤 聖子	国連教育科学文化機関 (UNESCO)	Fostering Freedom of Speech and Journalistic Liberty in the Face of Disinformation
桐朋高等学校	小池 翔太 稲田 孟	国連食糧農業機関 (FAO)	Optimizing Agri-Food System to Achieve Global Food Security
灘高等学校	高島 晟輔 湯川 友太	国連高等難民弁務官事務所 (UNHCR)	Confronting Social Service Inequalities for Refugees and Migrants Post-COVID-19
武蔵高等学校	菊池 亮 股野 晃瑛	国際電気通信連合 (ITU)	Reevaluating Cybersecurity Standards in a Post-Pandemic World

【受賞】

ポジションペーパー賞(Position Paper Award)

渋谷教育学園幕張高等学校

灘高等学校

奨励賞(Best Improvement Award)

頌栄女子学院高等学校

聖心女学院高等科



参加者報告（アドバイザー）

西田 翔

グローバル・クラスルーム日本協会 副事務総長・派遣担当主査

慶應義塾大学法学部政治学科 2 年

本事業実施にあたってご協力いただきました各校の先生方また派遣生一同、並びに平素より弊協会の事業にご支援ご協力いただいている皆様に厚く御礼申し上げます。

3 年前の同時期には派遣生の立場として本事業に参加した私にとって、本事業は模擬国連活動における最大の挑戦として根強く記憶に残っています。本年度は 2 年ぶりの渡米を試み直前まで方策を模索して参りましたが、新型コロナウイルス感染症の蔓延を鑑み、本年度もオンラインでの会議参加を決断いたしました。多方面にわたって多大なるご協力いただいた故に非常に苦しい決断となりましたが、本年度の派遣生はその顔を見せることなく会議準備に励み、慣れない状況下でも最善を尽くす姿を終始見せてくれました。その背景には、多くの文献をあたることで得られた知識や政策発表会などから得られた専門的な知識を基に作られた政策と、事前の綿密な準備によるものであると派遣報告会の場を通して実感いたしました。そのような活力を得た派遣生は自分なりの魅力あふれる大使像を発信できる人に変化したと感じました。

少々脱線しますが、私個人が考える模擬国連活動が高校生の恰好の成長源たる所以には、数多の逆境の中でも常に全力で取り組む姿勢と憧れの存在を見つけられることであると考えています。弊協会が主催する全日本高校模擬国連大会も昨年で 15 回を迎え、応募者が年々増加するとともに、参加者の模擬国連に対する理解が深まりつつあります。そのような背景には、数年前に模擬国連活動に力を注いだ方々の思いが伝承され、各参加者に「こんな大使になりたい」という高い目標があるからであると実感しております。

派遣生の皆さんは今回の大会を踏まえ、他者に大きな影響を与えられるほど強く魅力あふれ、憧れる「格好良い大使像」を会得しました。本事業を通して成長した派遣生の姿が今後模擬国連活動に全力を捧げようとする全国の中学生・高校生に刺激を与え、益々模擬国連活動が活性化されることを確信するとともに、今後もそれが永劫的に続くことを切に願っております。

重ね重ね、各校の先生方また派遣生の皆様に感謝申し上げます。引き続き、弊協会として高校生にとってよい「学び」の機会となる模擬国連活動の普及・推進に向けて尽力してまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

田部井 淳志

グローバル・クラスルーム日本協会 研究次長

東京大学工学部計数工学科 3 年

はじめに、平素より弊協会の国際大会派遣事業にご理解・ご賛同・ご協力・ご支援いただいている皆様に厚くお礼申し上げます。私は今回の派遣事業にて、研究の立場から準備、並びに当日の派遣生のサポートを行ってきました。

新型コロナウイルスの影響は続いており、今年も派遣事業はオンラインでの国際大会参加という形になりました。現地派遣の予定をオンラインに変更したり、オンライン会議になってからも日程の変更があったり、2 議場合同で会議が行われることになったりと、派遣生は様々な困難を強いられることになりました。私自身、これだけの変更の中で派遣生がどれだけ対応できるのか、不安なところもありました。

しかし派遣生たちはこれらの困難を乗り越えて、準備期間をひたむきに、しなやかに走り抜いてくれました。大学生である私も驚かされるほどの量のリサーチをしていた派遣生もいれば、ペアの間で何度も話し合いを重ね、非常に深いところまで「ロシア」という担当国を仮説ベースで掘り下げて検証していた派遣生もいました。最終的にはどのペアも議題理解・自国理解がかなりの高水準に達しており、担当国のロシアを取り巻くウクライナ情勢が刻一刻と変化する中でもそれを組み入れた政策を用意してくれました。

そして会議当日、オンライン議場と対面議場を組み合わせたハイブリッド議場ではオンライン議場の意見が対面議場に届きづらいという難しさがありました。しかし、オンライン議場から対面議場に自身の政策を伝えるために視覚的に分かりやすい画像を作成したり、伝わりやすいスピーチの形式を利用したりと、工夫を凝らして会議に臨む派遣生の姿は逞しいものでした。

今回の派遣事業全体を通し、派遣生たちはどのような困難を前にしても「もうやめよう」と投げやりになったり、諦めたりすることは決してなく、常に前向きに取り組んでくれました。その姿勢と熱意には私自身、大いに学ぶところがありました。今回うまくいったことも、そうでなかったことも、きっとこれから先彼らの糧になっていくだろうと思います。今後もあの熱意と前向きな姿勢で、彼らがさらなる挑戦を続けてくれることを祈っております。

末筆ながら、今回の派遣事業にあたり、ご支援・ご協力を賜りました皆様に心よりお礼申し上げます、私からの事業報告とさせていただきます。

近藤 紀仁

グローバル・クラスルーム日本協会 研究

早稲田大学政治経済学部政治学科 3 年

まず初めに、今回の派遣支援事業にご協力いただいたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。私は本事業において研究の立場から主に会議面でのサポートをさせて頂きました。

今回の第 16 回派遣事業は事業の過程で困難な出来事に多く見舞われました。当初は 3 年ぶりにニューヨークに渡米することが予定されていましたが、コロナの再拡大の影響により最終的に昨年同様オンライン開催となりました。さらに本事業の内容自体もニューヨーク側の運営団体が昨年から変化したこともあり多くのトラブルに直面しました。しかしそのような中でも派遣生たちはやる気を失うことなく真摯に向き合い、熱意をもって最後まで会議に取り組んでくれました。

本事業では日本代表団はロシア大使を務めました。昨今のロシアのウクライナへの侵攻の影響もあり、派遣生たちにとっては「ロシアとして何ができるのか」「ウクライナの問題を非難されるのではないか」といった漠然とした不安を常に抱えた不透明性が高い状況だったと思います。ですが派遣生たちはそうした刻一刻と変化する状況に対しても豊かな想像力と柔軟な発想力をもって政策や戦略に適宜修正や改善を行いつつ柔軟に会議準備に取り組んでくれました。

そして会議当日を迎えましたが、会議がニューヨークで実施されている対面議場にオンラインで参加するという形であったこともあり当初は運営との意思疎通に苦戦を強いられました。しかし 1 日目の中盤以降は派遣生たちも会議に順応しはじめ、オンラインという不利な形式でも最大限できることを探して一生懸命頑張ってくれました。2 日目も含め、会議全体を通して他のオンライン議場の大使との連携や作業文書の作成などを通した会議中の彼らの「不利な状況にも果敢に向かう姿勢」はとても目を見張るものがありました。

大会を通して様々な逆境に直面した派遣生の皆さんでしたが、そうした中でも諦めることなく前向きに捉え熱意をもって最後まで走り切ったこの経験は今後の彼らの人生にとっても大きな経験となったと思います。また、この事業を通して得たこうした貴重な経験とともにこの経験を乗り越えた仲間存在は派遣生にとって一生の思い出になったと確信しております。彼らが今後もさらなる躍進を遂げることがとても楽しみです。

最後に改めて本事情にご支援いただいた皆様、そして携わって頂いたすべての関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。私からの報告といたします。ありがとうございました。

参加者報告（派遣生）

小澤 秀周

海陽中等教育学校 6 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

パンデミックによって各国は大小様々な経済打撃を受けた。経済は多角的かつ緊密に他国、ひいては国際経済とリンクしているため、一国でもデフォルトが発生すれば連鎖的にデフォルトが発生していき、国際的な債務危機につながる恐れがある。そのような現状を踏まえて、サプライチェーンや食料問題、労働や石油価格などの多種多様なファクターを総括しながら効果的な政策を立案する必要がある。その際、国際機関や民間企業が、どのようにそれらに関わっていくかも慎重に検討すべきだ。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

私たちが立てた政策の主軸は IMF 改革である。数種類ある IMF の金融支援プログラムの最たるもので、パンデミック後においても多く利用されているのが、金融支援と引き換えに対象国の政策に対し、特に構造改革を中心とした政策提言及び干渉を行うというプログラムである。しかし、現在の経済状況悪化の要因は各国政府の政策の失敗ではなく、完全に COVID-19 によるものであるので、これらの政策提言が課されない、異なるプログラムを主軸に支援を行っていくことを求めた。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

ロシアという国家の特性上、特にアメリカにこれ以上国際社会におけるイニシアチブを発揮させないことを念頭に置きながら戦略を立てた。また、ロシアという国家が持っている、国際社会や国際機関、各国への影響力を認識しながら慎重にスピーチや DR の作成を進めた。ウクライナ侵攻には会議内で極力触れず、加えてロシア国債が各国の経済制裁によってデフォルトの危機に陥っていたことから、政策実施に向けた積極的な対話や国際協力の必要性を強調することを心掛けた。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

議題理解のために、密度の高く濃いリサーチを行うことで、国際社会、特に各国同士のパワーバランスや特に経済分野におけるこれまでの国際社会や各国の取り組み及びその歴史に対する理解をさらに深めることができ、同期の派遣生や派遣団 OB・OG の方々とお話ししたことで、より知見が広がった。事前準備から会議当日まで全て英語を用いてのものであったため、英語スキルやリサーチ力、スピーチ力など、幅広い模擬国連力の向上にも繋がったように思う。

中島 大雅

海陽中等教育学校 6 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

会議のメイントピックとしては“Tackling the imminent global debt crises of a post-pandemic world”という議題が設定されており、その他にサブトピックとして、“Supply chain issues”, “Labor issues”, “Food crises issues”, “Oil prices and global economy”の4点が設定されていました。新型コロナウイルスの感染拡大によって経済的な打撃を受けた各国、特に重債務貧困国では税収が急激に減った結果、各国政府の政府債が債務不履行を起こす可能性が上昇したため、国際社会全体で連帯することで、複数国での連鎖的な債務不履行を防ぐことが求められ、議論されました。また、債務不履行に伴って起きる可能性のある、公共サービスの破綻の対策についてもサブトピックという形で議論を行いました。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

私たちは、この議題の政策を立てるにあたり、最初に「IMFの管轄事項かどうか」という仕分けを行いました。この会議において、議場設定は総会であるものの、債務返済の支援を実行するのは主にIMF、そして非公式機関ではあるものの関連しているパリクラブとなります。そこで、IMFが実行することとなる政策と、他機関（WHO、G20、ILO等）が実行することとなる政策を分けて立案しました。具体的には、IMFにおいてはコンディショナリティ政策（構造調整プログラム）の再検討と、パリクラブにおけるリスケジュールの提案（非公式機関ではあるものの、参加国の賛成を得ることができれば言及が可能だと考えたため）、DSSI（債務支払猶予イニシアチブ）の再検討と手続きの迅速化を提案しました。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

私たちはロシア大使という非常に難しい立場でした。特に、会議直前に「ロシアの影響でスリランカで債務不履行が発生した」「ロシアでもドル建て負債の一部をルーブルで返済するという事実上の一部債務不履行が発生した」という2つの出来事が現実起こったため、グルーピングについては特に慎重にならざるを得ませんでした。そこで、重債務貧困国と主に交渉することで、「経済的・人道的支援を行う代わりに制裁解除を求める」という要求ができるのではないかと考えました（実際には「制裁解除についても今後議論をしていく」程度の文言になるであろうことも想定していました）。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

私が今回の会議で得られたことは「自国に不利な状況での交渉の経験」と「英語力の不足の実感」です。前者については、全日本大会においてもイスラエル大使という難しい立場ではあったものの、今会議においてはロシア大使というさらに難しい立場となりました。その中でも、自国が交渉の道具とできるものをリサーチ段階において用意しておき、他国との議論を通じて、決議案の提出までたどり着けたことは非常に貴重な経験だったと思います。

後者についても、母国語でさえも複雑になる議場内での臨機応変な対応を英語で求められたのは大使としてではなく個人としての弱点を見つけられた良い機会になったと感じました。

最後になりますが、このような貴重な機会を下さり、支援してくださった皆様、本当にありがとうございました。

金成 華琳

渋谷教育学園幕張高等学校 3 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

私たちの議場は国連安全保障理事会、議題は「ティグライ戦争の緩和」でした。エチオピアのティグライ地方で 2020 年 11 月、エチオピア政府軍とティグライ人民解放戦線との間で軍事衝突が起き、内戦が始まりました。その結果、ジェノサイド、性暴力、食糧難など市民へも被害が及び、双方が人道法を犯していると言われていました。しかしながら情報制限によって実態が把握しづらく、職員へ危険が及ぶため人道支援も難航している状態であり、それらの問題を安保理としてどのように解決すべきかということを議論するというものでした。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

私たちはロシア大使として、国家主権を重要視し、内政干渉とならないようにエチオピア政府主導の和平交渉を提案する政策を立てました。具体的な内容としては、エチオピアの全ての民族のリーダーを集めて停戦の方法とエチオピアの未来について話し合うというものです。これによって戦争の根本的解決と将来の争いの火種の除去ができ、人道的にもアフリカの経済的にもそしてそれによってロシア自体の利益も満たすことができると考えました。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

ロシアは内政干渉を特に重視している点において少数派と言えますし、まさにウクライナにおいて戦争を起こしている、今回の議題に関しては「どの口が言っているのか」と言われてしまうような国でもあります。一方で、常任理事国であり、同じく常任理事国である中国と似た立場にあります。その立場を活かして同じようなスタンスを持った国とは協力し、違った立場の国大使とも粘り強く交渉していくという戦略を立てました。また、アンモデだと孤立するかもしれないため、モデを中心に議論を進めていく計画を立てました。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

まず議題に限定して言えば、特に 2022 年 2 月から視線が向けられがちであったウクライナ侵攻の陰で起きている問題について知ることができました。逆にウクライナ侵攻についてもロシア大使になったことでリサーチをすることも多く、様々な視点から見るできるようになったと思います。会議に関して言うと、普段は言葉を交わすことのないような海外の高校生と議論をし、慣習の違いなど、見習いたい良さもあれば逆に日本のこういうところがいいなという点もありましたが、全て含めて学びになったと思います。

金城 芽依

渋谷教育学園幕張高等学校 3 年

2 月 24 日に世界中を駆け巡った、ロシア、ウクライナ侵攻の報。日に日に強くなるロシアへの風当たりと深まる国際社会の溝に、思わずリサーチの手が止まりました。私たちに与えられた設定は、安全保障理事会のロシア大使で、議題は“De-escalating the Tigray war”。ティグレ紛争と呼ばれる、2020 年の 11 月からエチオピアの北部で起きているティグレ人民解放戦線と連邦政府軍の軍事衝突を鎮静化し、同時に未曾有の人道危機に陥っている地域の市民の支援と救済措置の実現、それらに付随する難民の権利保護の方法や戦争犯罪の捜査を要求するか否かが主な課題でした。しかし、果たして今のこの状況で、ロシア大使として安保理で他国の紛争解決のための議論をするべきなのか。政策云々の前に、まずは会議における大使としての自分たちの存在意義を問うところから始まりました。

そして冷戦時代の紛争から現在進行中の戦争まで、様々なケースを調べていく中で気づいたのは、いつも世界のどこかで複数の戦争が起きているという事実と、報道される戦争と、その報道の立場がごく限定されていて、実情や別の側面が知られていない、いわば「見えない戦争」が無数にあるということでした。昨今はネットのおかげで多くの情報に容易に触れることが出来るとはいえ、戦争も、飢餓や、格差や、災害と同様に、報道され注目されなければ、存在すら認識されないのです。しかし、たとえ国際社会から注目されなかったとしても、その戦争が無視され、放っておかれても良いという理由にはなり得ません。このスタンスの下、ペアとの間で（ウクライナ侵攻に対するロジックとレトリックを踏まえたうえで）「ある 1 つの戦争を重視するあまりに、国際社会が他の戦争解決を後回しにしてはならない」と主張し、建設的な議論を促すことが、他でもない安保理のロシア大使にできることだという結論に至り、やっと堂々と会議に参加する大義名分を得ました。

さて、そうして迎えた AMUN 当日。悉くイレギュラーに振り回された高校三年間の象徴であり総決算であるこの大会で、自分たちの手では如何ともできない事態にも見舞われつつ得た学びは、呆れるほどにシンプルなものでした。

『沢山の人たちの支えの中で、今ここに立っている』

手垢のついた、安っぽい響きの、ありきたりな言葉です。

でもどうやら人は上を向いて歩いたり、前を向いたり、他人の足元を見て歩いてみたりするわりに、案外自分の足元はあまり見ないのかもしれませんが。足場は足場としてあって当然に見えて、しかしその一部が欠けて足を踏み抜いて初めて、それが最初からあったわけではないことに気づいたのです。努力を精一杯発揮できるのは、そのための環境を丁寧に整備してくださる方々の存在があってこそであり、それを享受できるのは当たり前ではない。日常の中の「当たり前」が突然消えたコロナ禍の締め括りに、相応しい学びだったと思います。

最後にはりましたが、このような機会を与えて下さったグローバルクラスルーム日本委員会の皆様や顧問の先生方、そして慣れないことばかりの挑戦を応援して下さい下さった先輩方、友人、後輩の皆さん、そして家族に、心から御礼申し上げます。

田原 幸奈

頌栄女子学院高等学校 3 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

担当議場は世界保健機関(WHO)で、議題は「コロナ禍における非感染性疾患(NCDs)の治療における健康格差への対応」でした。WHO とは、人間の健康を基本的人権の一つとして、その達成を目的に設立された機関です。NCDs は不健康な食事や運動不足、喫煙、過度の飲酒、大気汚染などにより引き起こされる、がん・糖尿病・循環器疾患・呼吸器疾患・メンタルヘルスをはじめとする慢性疾患をいいます。世界で NCDs に起因した死亡者は全死因の約 71%を占めます。こうした背景から今会議では NCDs による早期死亡、低中所得国における対応策が議題の軸とされました。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

2つの大きな政策を立案しました。1つ目は、NCDs による早期死亡割合の地域分布を地図にする、“NCDs Mortality Map”の作成です。目的はこの地図を各国が WHO に提出し、それにより WHO がその国の地域ごとに支援を行うシステムの形成でした。2つ目は、保健教育の充実です。主に、初等教育に重きを置いた保健授業や、無料の健康診断の実施を考えました。初等教育にしたのは、ロシア国民の中では「予防よりも治療」という固定観念があり、その観念が定着する前に、保健教育を通じて、予防の大切さを広めたいと考えたからです。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

今会議では、ロシア大使という、今日の情勢を考慮すると大変難しい国の大使を担当させて頂きました。初めは、他国に意見を汲み取ってもらえないことへの不安がありましたが、戦略を練っていくうちにロシア大使らしい会議行動をとることが大切だということに気づきました。そのため、会議の戦略としては、強いロシア大使であることを心がけること、さらには、過去の NCDs への国内で成功した対応策を各国に共有し、ロシアの NCDs への関心の高さをアピールしていく戦略を立てました。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

自らのもつ対話力への自信を得ました。また、多角的な視点を持って考える事の大切さを学びました。私は英語に自信がなく、話せるかとても不安でした。しかし、英語に詰まっても相手との対話、そしてリスペクトを忘れなければ言いたい事が通じることを学びました。そして、ロシアという難しい立場の国を経験できたことで、ニュースになっている事柄について、一つの方面からでなく、多方面から考える事の大切さを学ぶことができました。最後になりますが、ここまでサポートをしてくださった先生方そしてグローバルクラスルームの方々、本当にありがとうございました。

松本 彩

頌栄女子学院高等学校 3 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

世界保健機関(WHO)で、「コロナ禍における非感染性疾患(NCDs)の治療における健康格差への対応について」を議論した。WHO はすべての人々の健康を増進し保護するため互いに他の国々と協力する目的で設立された。コロナの流行により各国は感染性疾患への対応に集中していたが、それに加えて NCDs はさらなる議論が必要とされている。NCDs は現在の世界全体の死因の 3 分の 2 を占め、特に低中所得国の負担となっている。主な NCDs は糖尿病、癌、心血管疾患、循環器疾患であり、これらの原因としては飲酒喫煙、不健康な食生活などが挙げられる。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

Change と equality の 2 つを軸に政策を立てた。Change は予防よりも治療という国民の固定観念を変えることを意味しており、主に初等教育を通じた NCDs に関する啓発に加え、ワークショップの開催、小学校での毎年の健康診断を実施することなどを勧める。また、equality はユニバーサルヘルスカバレッジ(UHC、誰もがが必要な治療を受けられる状態のこと)の達成を意味する。これを達成するために NMM という NCDs 早期死亡率を可視化したマップグラフ作成を各国に要求し、支援が必要な地域へ物資や資金援助を行う。他にも喫煙所の設置など、短期的な政策も立てた。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

今まで比較的協力的であった保健の分野であるからこそ、今のロシアができることは国際協調の姿勢を見せることであると考えた。協力する姿勢を示すために必ずどこかのグループには所属し DR 提出を目指すことを心掛けた。同時に、ロシアとしての国益は必ず守られるよう意識し少しでも国益を損なう内容があれば明確に理由を述べ削除を求めた。また、特別軍事作戦に関して言及された場合は WHO 憲章より文言を引用し、保健の話し合いを優先するべきだと主張することを念頭に置きながら会議に臨んだ。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

リサーチ段階ではロシア情勢が日々変化していたため政策や主張の修正を多々行うことがあった。会議当日に議論が白熱していた際はどうロシアの意見を反映させた DR が作れるかを考え直し、作成した文言の再検討や同じくオンライン参加であった国と連絡を取り協力するなどをして少しでも議場に貢献できるようにした。これらの経験から、臨機応変な対応力をさらに高めることができた。また、その場で考えすぐ行動に移すことの重要性を改めて実感した。

永田 理華

聖心女学院高等科 3 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

UNESCO は、教育、科学、文化の側面からの国際平和構築を目的とした国連機関の 1 つです。今会議の議題は、“Fostering Freedom of Speech and Journalistic Liberty in the Face of Disinformation”でした。SNS の普及に伴い偽情報が増える中、ジャーナリストへの弾圧や昨今のウクライナ情勢でも顕著な国家によるプロパガンダといった情報統制が偽情報の規制という名目で正当化されていることが多くあります。そうした状況を鑑み、表現や報道の自由と偽情報の規制を如何にして両立するかという内容です。昨年のノーベル平和賞をジャーナリスト 2 人が受賞するなど、ホットで親しみやすく、しかし一方で深い議題でした。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

ロシアはソ連崩壊後の混乱の歴史から、国家の安定を非常に重視し、その維持は表現や報道の自由よりも優越すると考え、国家の安定の維持という名目の下、不都合な情報は偽情報として厳しく統制しています。そのため「現代には中立的な情報はない」と訴え、「何が偽情報・プロパガンダにあたるか」の基準を国際的に統一しないこと、そしてその上で、「特に SNS での偽情報を厳しく統制すること」を主張しました。また、異なる価値観も受け入れられるべきとの立場から、「全ての価値観の共存」も訴えました。メディアリテラシー教育では、「カリキュラム作成は各国裁量」を条件としました。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

今回の議題では、ウクライナ情勢の影響もあり、ロシアは少数派でした。しかし少数派であるということは、会議行動の一貫性と会議序盤の存在感があれば、議場で重要な大使になれると考え、スタンスを徹底的に固めて自分達の柱や主張を簡潔にまとめた資料を用意し、また、抽象と具体の両輪での議論を提案する事で、国益と国際益の双方を満たす議論を進めるなど、議場への影響力を重視しました。更に、各国の国益を掴み交渉の引き出しを作るためのモデルを提案、自国の主張をする際には、ロシアだけが特別に異なっている印象を与えないよう、普遍的なことも交えて訴えるなど、少数派であることをメリットにできるような戦略を立てました。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

2月に軍事侵攻が勃発し、会議での振る舞いに悩んだ私達は、ロシアらしさを残しつつ、随所に少しでも私達の色を加えました。勿論、国益や基本姿勢は実際のロシアに忠実であるべきですが、100%なり切らずとも、深い理解と想像力を働かせて自身の色がつけられるからこそ、豊富に議論が展開でき得られる学びも多いなど、共に議論していて面白いと気づきました。今大会では、他にも、議論で重視する点や様々な分野の情報や知識の繋がりが一層求められる点など、気づきや刺激が沢山あり、模擬国連に熱中した日々は、自分の可能性を広げ、自身の糧となるかけがえのない時間でした。ここまで私達を温かく支えて下さった全ての方に感謝致します。

三澤 聖子

聖心女学院高等科2年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

議場は UNESCO で、“fostering freedom of speech in face of disinformation”という議題を議論した。サブトピックとして、メディアリテラシー教育、プロパガンダと公共外交、偽情報と表現・言論の自由の両立の3つが設けられていた。偽情報が拡散され、情報があふれる現代に、どのようにして偽情報の拡散防止と表現・報道の自由の両立を担保していくのか、議論した。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

ロシアは国家の安定を特に重視し優先する国であり、それを揺るがす情報は厳しく統制したい。主に欧米諸国と理念的に対立する為、ロシアの国家方針に沿った理念を主張し合意を目指した。

リテラシー教育に関して、第三者の仲介は拒否しつつ、遠隔地への教育拡充や教育の無償化を提案した。プロパガンダについては、政治的意図を持つか否かの判断は主観的なものであり、その基準を統一するのは不可能である事を主張した。偽情報と表現の自由の両立に関しても、偽情報と判断する基準を統一すべきでないことと、偽情報を厳しく統制することの重要性を訴えた。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

ロシアは、議題が現在の国内安全保障に直結していること、国際的にこの議題に関して非難を受けていることの2点が、他国と異なる部分である。また、理念的な部分での根本的な対立が存在する状況の中で、どう自国の意見を主張するかが重要であった。

まず一つ目に、理念部分を反映した細かい文言に拘り、交渉を進めやすくした。二つ目に、深い対立が予想される国との交渉に向け、相手の論理を崩し、自国の論理に説得力を持たせる具体例を多く準備した。最後に、オンラインでのハイブリット会議参加に伴い、自国の主張を図式化し共有する工夫もした。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

事業を通し、英語力等知識面ではもちろん、精神面で大きく成長した。ロシアのスタンスを自分の中に落とし込み、納得のいく論理を立てるのが非常に難しかったが、理解を放棄せず、自分なりに粘り強く考えた経験は貴重だ。加えて、自分にとっての常識と異なる国について深く知る中で、自分の視野の狭さを痛感した。また、成果と議論の比重が日本と異なることなど、世界の高校生の多様な価値観を実感できた。最後に、振り返ると、沢山の人の支えがあった事を痛感する。周りへの感謝を胸に、今後も模擬国連に向き合っていこうと思う。

稲田 孟

桐朋高等学校 2 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

今回の国際模擬国連大会にて、僕たちは、ロシア大使として国連食糧農業機関 FAO の議場に参加しました。FAO は世界の食糧問題及びその関連するトピックについて議論を行う機関です。世界中の飢餓の撲滅を機関の目標・意義として掲げており、そのエッセンスは SDG2 の Zero Hunger に組み込まれています。議題は「地球規模の食糧安全保障と環境繁栄を達成するための食糧農業システムの最適化」で、世界中の人口を養うには生産国と消費国など、世界中の結びつきが不可欠だという認識のもと、誰もが食料を安全に取得できる世界を目指して議論を行いました。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

僕たちは議場にて、過去の FAO 文書の見直しを提案しました。

FAO の文書は 2009 年を最後が変わっておらず、既に期限を迎えた MDGs に焦点を当てるなど矛盾点を抱えておりました。そこで、世界の指針を示すことは最大の小麦輸出国であるロシアの状況にも影響を及ぼし、政策の上で重要となるため、今の世界において通用する文書になるように改定を提案しました。また、ロシアが世界の食糧安全保障に多大な影響を与え、貢献を行なっていることを強調し、世界へのアピールを行いました。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

僕たちは、ロシア大使として政策に 2 つのポリシーを取り込みました。まず 1 つは「強いロシア」です。ロシアは食糧生産において最大の影響力を有し、国際情勢においても重要な国です。食糧安全保障の分野においてロシアの強みを活かせるよう強気の姿勢を目指し、世界情勢における「強いロシア」を貫くことを目指しました。

もう 1 つは「小麦輸出の促進」です。ロシアは食糧を輸出産業の要にすることを掲げており、そのドクトリンに基づいてこの戦略を立てました。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

派遣事業で得られたものとは、国際的で大きな大会に取り組める喜びです。自分にとって過去最大の規模の大会であり、時間をかけて大きなモチベーションを持ちながら取り組むことができました。特に、英語力についてはとてもモチベーションを持って勉強をしていました。規模の大きさや名誉、そして自分たちの努力もあって家族や友人、先生など多くの人に応援をしていただきました。その喜びと満足感はこの事業を通じて熱心に取り組むことで得られたものだと考えます。

小池 翔太
桐朋高等学校 2 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

私達は国際連合食糧農業機関（FAO）の”地球規模の食糧安全保障と環境繁栄を達成するための食糧農業システムの最適化”を議題にした会議に参加しました。FAO は世界全体の飢餓の撲滅、食糧不安の解消、栄養強化に焦点を当てた国連機関で、現在では主に 2050 年に 90 億人に上るといわれている世界の人口をどのようにして養っていくか、ということ話を合っています。

食糧安全保障とは、すべての人が栄養価が高く十分な量の食糧が手に入れることができること、と定義づけられており、ただ十分な量の作物や畜産物を育てることだけではなく、すべての人がそれを享受することができるために必要な交通などのシステムの強化も含まれます。またこれらの課題は”Zero Hunger”等の SDGs と強く関係があるものも多く、これらの課題解決のためには安全保障とはいえど世界全体での協議が必要となるのです。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

ロシアは広大な土地と豊富な資源により、世界の食糧安全保障に大きな影響を与えています。とりわけ小麦の輸出量は世界一で、現在欧米諸国からの制裁報復措置として、小麦や天然ガスなどの輸出規制を行っています。ロシアから小麦などを輸入している国の中には、ロシアの輸出規制により国内の食糧供給状態が芳しくない国もあります。このような状況を踏まえて、欧米諸国側に制裁解除を求めていくという政策を立てました。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

ロシアは現在ウクライナとの戦争状態におかれ、特に欧米諸国からは孤立した立場にありますが、そのような状況でも大統領が掲げる”強いロシア”を念頭に置き、積極的な姿勢を見せ続けることを意識しました。また一方で旧ソビエトの時代から続く一部友好国や、小麦などの主要輸入先を特にロシア頼っている国との関係強化を図り欧米諸国に対抗し、世界に与えるロシアの影響力を保持し、国際的な地位をできるだけ維持しようとしてしました。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

JCGC の方々のご尽力により、日本では体験できない英語での模擬国連への参加と、表敬訪問で実際に国連で働く方のお話をうかがえたことはとても貴重な体験でした。また派遣団の中での生徒同士、またどんな時でも親身になってくださった委員の方々との交流は、自分の中で計り知れない価値を与えてくれました。

湯川 友太

灘高等学校 2 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

UNHCR によると、迫害、紛争、暴力、人権侵害などにより 2020 年末時点で故郷を追われた人の数は約 8240 万人である。そして彼らの約 85%は発展途上国または LDC で暮らしており、紛争、気候変動等様々な困難の最前線に立たされている。特にコロナ禍では、ワクチンを受けられず衛生環境も悪いため、感染源になりうるだけでなく、職を失うことによって貧困や不法労働、女性や子供の場合だと虐待等の人権侵害を受ける事が多くなっている。今回の議場ではこのような、コロナ禍の難民に対する社会サービスの不平等の是正について、主に話合った。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

加盟国は UNHCR の議場で、世界中に点在する難民らについて、各集団ごとに彼らを難民にした原因国がどこなのかを議論し、そこで特定された国が彼らに対し難民保護を行うよう要請し、それを UNHCR が監督する。また、UNHCR は、難民の保護を自国だけで行うのが難しい国に対して、難民保護に関する情報共有や第三国定住等の仲介、人的、金銭的支援を行う。特にこのコロナ禍に対する対策として、難民に対するワクチン接種を UNHCR が主導して進める。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

ロシアのスタンスとしては、自国の周りの難民で手いっぱいなので、難民に関するグローバルコンパクトの「責任の共有」を否定したい。つまり、他地域からの難民を自国内に受けいれたり、その難民の支援に極力自国のお金を使ったりしたくないということである。そこで、「自国の出した難民は自国で面倒を見る」「そのサポートを UNHCR が行う」ようにするため以上のような政策をとり、同じくコロナ禍において自国内の難民を保護することが難しくなった国と友好的にして、難民の手厚い保護を求める国と、どれくらいの援助をもらえるかの交渉をしていく戦略を立てた。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

大会に向けた準備を行う中で議題に関する知識、すなわち難民に関する様々なデータや現状を知ることができた。日本で普通に生活する中で、生活保護の話を書くことなどはあるものの、難民について深く考えることはまずないので、このような機会で世界の難民事情を知ることが出来たのは良かった。またロシア大使としての立ち回りを考える中で、テレビをちらっと見るだけではわからないようなロシアのスタンスについても、より理解が深まったと思う。何より、様々な国の人とオンラインではあるが、一つのことに英語で真剣に話し合えたのは良い経験だった。

高島 晟輔

灘高等学校 2 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

今会議の議場である UNHCR は、第二次世界大戦後の 1950 年、避難を余儀なくされたり家を失ったりした何百万人ものヨーロッパ人を救うために設立され、現在も世界中の難民の保護や支援のために、世界各地の政府や民間から支援を受けながら活動しています。

議題は、「ポストコロナにおける、難民・移民にとっての社会サービスの不平等に立ち向かう」ことについてでした。難民・移民の受けられる社会サービスは限られており、この問題は難民・移民がワクチンを接種できないことなど、コロナ禍で顕在化されました。世界がポストコロナへと動いている今、この問題の解決に向けた行動が大使に求められました。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

世界で発生している移民や難民に関して、加盟国は UNHCR の議場でそれぞれの移民がどの国が原因で発生した移民・難民なのかを議論し、特定します。その上で特定された国がその移民や難民を保護するよう要請し、UNHCR が監督します。また、UNHCR は難民の保護を自国だけで行うことが難しい国に対し、技術や人的支援、ノウハウ、難民保護に関する情報などの共有や第三国定住や出身国への帰還の仲介を行います。特に COVID-19 に関しては、ワクチン接種をする施設を UNHCR が用意し、難民や移民が滞在国のシステムに関係なくワクチンを接種できるようにします。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

ロシアは、コロナ禍での経済的ダメージもあいまって、自国に関係する難民の保護がかなり大変なため、他国が原因で発生している難民を自国内に受けいれたり、その難民の支援に自国のお金を使ったりしたくありません。つまり、難民に関するグローバルコンパクトの「責任の共有」を否定しています。

そこで、「自国の出した難民は自国で面倒を見る」「そのサポートを UNHCR が行う」ようにするため上で述べたような政策をとり、同じく新型コロナウイルスの影響で自国内の難民を保護することが難しくなった国と協力し、政策が反映された条文になるよう、スタンスの異なる他国と交渉することを目指しました。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

大会前の準備段階では、これまであまりしてこなかった「英語でのリサーチ」を多くしました。日本語よりも英語の方が記事やサイトの量が多く、その分質の高い情報や細かい情報を得られることがわかりました。また、「ロシア」という大国の大使を担当したことで、小国とは異なる、大国ならではの難しさと面白さを感じることができました。大会当日は、英語を正確に理解し、自分の意見を表現することの難しさ、思うように表現できないもどかしさを感じ、今後英語能力を高めていきたいという大きなモチベーションとなりました。

股野 晃瑛

武蔵高等学校 3 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

僕たちが出場した議場は、国際電気通信連合(ITU)でした。ITU は、世界最古の国際機関であり電気通信分野において各国間の標準化と規制の確立を図っています。そのうちのサイバーセキュリティについて、ロシア大使として議論しました。サイバーセキュリティはサイバー空間、いわばインターネット空間での脅威への対処より誕生した概念です。これは、病院などの重要なインフラへのサイバー攻撃のみならず、金融機関や個人のコンピューターへのハッキングなど様々な領域で話題になっています。またサイバーセキュリティは、情報流通や情報保護も含みます。よって、サイバー空間での脅威を技術の問題として捉える欧米諸国等と情報の中身も含めた問題と捉える中露との間には深い溝があります。特に昨今のウクライナ戦争もあり、ロシアにとって政府サイト改竄や国内メディアのハッキング防止や情報保護は喫緊の課題です。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

現代社会においてサイバー空間への依存度は日に日に増しており、その重要性が高まっています。世界の強国を目指すもののサイバー技術基盤のないロシアにとって、米中に主導権を握らせないためには有利な規則作りが不可欠です。そこで僕たちは、「国家政権転覆防止措置」、「サイバー軍縮基盤形成」、「国連機関の促進」を政策指針としました。ロシアにとって情報統制は政権転覆防止のため重要であり、そのためにも「サイバー空間への国家主権導入」やサイバー空間の越境性に反し、「内政不干渉の原則重視」との政策を立案しました。また、米中と比べ経済力が劣るため、軍事化の進むサイバー空間での破格なサイバー軍拡競争を技術分野から阻止するため、「マルウェア（ウイルス）拡散規制」や「完全自立型 AI の規制」を打ち立てました。最後に、国連機関には中露と同様、情報統制を好む国が大半であること、また GGE や OEWG などサイバー軍縮や政権転覆防止について話しやすい機関があることから、「国連機関の重要性を促進させるべき」との政策を作りました。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

サイバーの議論において大まかな対立構造として「企業中心の体制 vs 国家主導体制」、「自由な情報流通 vs 情報統制」、「越境性の尊重 vs 内政不干涉遵守」、「自由な技術向上 vs 技術規制」といったのがあります。表現の自由やインターネットの発展のためにも自由なサイバー空間を望む欧米諸国と情報統制を望む中露の間で協力できることは多くありませんでした。当然ウクライナ戦争による欧米諸国のロシア無視も考慮する必要がありました。さらに中露間でも、インターネットの国際性を担保したい一方で情報を厳格に規制したい中国とグローバルコモンズとしてのインターネットの発展を内心阻止したいもののプロパガンダとしてサイバー空間を利用したいロシアとの間には溝がありました。それでもなお、僕たちは中国と協力し、技術支援や情報統制をもとに途上国の支持を獲得するように意識しました。また、欧米諸国とはプライバシー情報の扱いやインフラ防護の観点で協力を模索しました。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

国際大会では、膨大な準備を通し国際理解と同時に勤勉さが身についたと思います。海外の新運営からの新たな議題追加など様々な流動的要求に対し、機転を効かせ臨機応変に対応することができました。一見、対応力と勤勉さは異なるように思えますが、勤勉さゆえの膨大な準備、担当国理解、国際理解をもって機転を効かせることができたのだと思います。

孔子の「学而不思則罔（学びて思わざれば則ち罔し。）思而不学則殆（思いて学ばざれば則ち殆うし。）」という言葉を意識し、担当国・議題のリサーチを徹底してきました。この言葉は、特に模擬国連についていうならば、リサーチばかりで、自ら考えないのでは議題の問題の本質を見抜けず、逆に論理構成ばかりを考え、書籍や論文をもって自ら調べないのも独善的な意見になるということです。つまり、「知識」と「論理」のバランスが重要となるのです。「知識」では、学術書、専門書など40冊以上の書籍によるリサーチを通し、ロシア外交、国際政治について知見を深めました。一方「論理」では、そもそもなぜサイバーセキュリティが重要なのか、それはロシアの国家戦略にどう関係するか、など基本を深く考える必要がありました。それは得た情報を自身の思考形式に当てはめることで初めて、理解でき、会議における「武器」へと変えることができるからです。このような模擬国連の全国大会・国際大会を通し、僕たちの通う学校の三理想の一つである「自ら調べ自ら考える力ある人物」に近づくことができたと確信しています。

最後になりますが、昨年の7月から「運命共同体」として二人三脚で協力してくれたペアの菊池、書類選考から引率など様々な形で支えてくださった先生方及びGCの皆様、本当にありがとうございました。

菊池 亮

武蔵高等学校 2 年

Q1. 自分たちが出場した議場・議題の概要を説明してください

僕たちが参加した会議の議場設定は、大まかに ITU と指定があるのみで詳細はなく、議題設定としてはポストコロナにおけるサイバーセキュリティ基準/規範の再評価というものでした。ITU は国際電気通信連合といって電気通信技術の発展及びその国際協力を推進する国際機関です。無線通信部門、技術標準化部門、開発支援部門に分かれていて、卑近な例としては 5G に関する議論を行うなど、技術的な側面が強い国際機関です。議題は、昨今声高に叫ばれることも多いサイバーセキュリティの強化へ向けて、サイバー空間における脅威認識やルールを明確化しようという趣旨の議題でした。

Q2. 自分たちが立てた政策の概要を説明してください

大国主義の実現と安全の信奉を通奏低音としつつ、国家による規制、サイバー軍縮、規範作りを三つの柱として政策を立てました。国家規制では国家の介入を正当化するため、ロシアにとっての偽情報拡散防止策、データ規制、サイバーの法規制などについて触れました。サイバー軍縮としては、既存の枠組みを利用したサイバー犯罪捜査、国連における議論や多国間協定の推奨及び完全自立型 AI の規制などの項目を設けました。規範作りとしては、国際協力や全体のコンセンサスの重要性を訴えつつ、ロシア主導の政府専門家会合などを推奨し、途上国の発言力が強い国連によってサイバー規範が話し合われるように取り計らいました。ここでは国家主権の導入についても記しました。

Q3. 他国との違いを踏まえて立てた戦略を説明してください

主に欧米諸国を想定して質問に答えます。まず、現在先進国と呼ばれる国で主流となる「情報・表現の自由の確保」「サイバー空間の民間努力による発展の保持」「グローバルコモンズとしてのサイバー空間の形成」「サイバー犯罪に対する厳格な対処」などの価値観に対し、途上国であるロシアはこれとは一線を画す見方をしています。よって相違を前提に二面的な戦略を立て、国際協力や格差解消、コンセンサス重視などの文言を隠れ蓑としつつ、自分たちの重視する政策を通せるよう画策しました。またロシアは、他国に理解されないほどに国家の安定と大国主義を深く重視しているため、価値観の違いをどうやって周りに認められるような正当性のある論理に落とし込むかを熟慮しました。

Q4. 派遣事業全体で得られたものを教えてください

派遣事業では、柔軟な対応力や忍耐力、及び国際社会の機微について実感とともに新たな知見を得ることができました。膨大な準備を通して国際報道の解釈等々をある程度語れるようになり、なかんずく議題に関しては高校生の中で一番なのは、という自負も得ました。しかしいざ蓋を開けてみればもどかしいことに、他の生徒のプレゼンスや声の大きさの前に思うようにはいかないことが多く、不本意極まりない悔しさとともに一方で、「これが海外か」と深く身に染みるものがありました。総体としても、新運営等々、徹頭徹尾予想もつかない出来事に遭遇しましたが、全て忍耐力や対応力などを養うにあたり時宜を得ていました。今回の悔しさをバネとして、得た見聞をもとに今後ともさらなる邁進を図っていく所存です。

支援団体一覧

本事業の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに熱く御礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます（敬称略）。

【後援】



国際連合広報センター
United Nations Information Centre

【助成】



【協賛】

株式会社公文教育研究会
公益財団法人公文国際奨学財団

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.



編集・発行 一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会

発行：2022年8月
